

Well-Moving City SAPPORO

2045 ビジョン（案）

～いつでもどこでも誰もが心地よく、心も一緒に動くまち～

2026年1月 札幌市まちづくり政策局

はじめに

札幌市は、豊かな自然と都市が調和し、四季の美しさが日々の暮らしに彩りを添える、世界に誇れるまちです。これまで、私たちは年間約5mの雪が降る厳しい冬と共存しながら、都市で豊かに暮らしていくための都市整備を進めてきました。特に大きな出来事としては、平成23年（2011年）の札幌駅前通地下歩行空間（愛称：チ・カ・ホ）開通があげられます。これにより地上・地下どちらも交通量が約2.4倍（約9万人）※¹になるなど、季節を問わず都心部を安心して移動することが可能となりました。また平成26年（2014年）には北3条広場（愛称：アカプラ）が完成し、都心部に訪れる多様な人々を受け入れるパブリックスペース※²となりました。このような都市の転換は自然発生的に生まれたものではなく、官民が協働して都市空間の在り方を考え、実践してきた結果であり、それ自体が大切な札幌の文化でもあります。

現在、札幌市は人口減少社会や環境問題への対応、持続可能な公共交通・除排雪体制の構築など多くの課題を抱えています。それらに対応しながらも、次の世代へ魅力的な都市空間の恩送りのバトンをつないでいくため、20年後の未来を見据えたビジョンとして、新たな都市空間コンセプト「Well-Moving City SAPPORO（ウェルムービングシティサッポロ）」を策定しました。誰もが、いつでも、どんな季節でも、安心して楽しく歩けること。その歩みの先で、人と人が出会い、心が動き、笑顔が生まれ、シビックプライド※³が育まれていく。そんな「心も一緒に動くまち、札幌」を、私たちは本気で目指します。

このビジョンは、お読みいただくみなさまが、「どのような都市で暮らしていきたいか」について想いを巡らせて、それぞれの立場で「Well-Moving City SAPPORO」の実現に向けて、何か一つでも行動につながることを願って作成しました。世界に先駆けて、積雪寒冷都市の札幌ならではのWell-MovingCityをつくるという挑戦に、産学官民による共創のチカラで、共に歩みを進めましょう。一步一步の先に、札幌の新しい未来が広がっていきます。

最後に、本ビジョンの策定にあたりご尽力を賜りました「札幌市ウォークアブルビジョン策定検討委員会」のみなさまをはじめ、市民ワークショップやシンポジウム、各地域における社会実験等、様々なご協力をいただきましたみなさまに心からお礼を申し上げます。

※¹...出典：「チ・カ・ホ開通10年目の整備効果（札幌市建設局土木部道路課）」

※²...パブリックスペース：道路、公園、広場等の公共的空間（民間所有の公開空地等も含む）

※³...シビックプライド：市民が自らの都市に対して誇りと愛着を持ち、地域の未来に主体的に関わる意識

目次

はじめに.....	2
目次.....	3
第1章 策定の背景	
1.背景.....	5
2.位置付け.....	6
3.課題.....	7
4.検討経過.....	12
5.まとめ.....	14
コラム：「世界のウォーカブルシティ（パリ、バルセロナ）」	15
第2章 目指すまちの姿	
1.都市空間コンセプト「Well-Moving City SAPPORO」	17
2.重点方針.....	19
3.各エリアの目指す姿.....	25
コラム：「第3次都心まちづくり計画に位置付ける主要検討路線等」	35
第3章 具体的な取組・手法	
1.取組・手法例.....	37
2.リーディングプロジェクト.....	46
3.モデルケースの紹介.....	49
第4章 推進体制、支援策の方向性	
1.推進体制.....	53
2.支援策の方向性.....	57
3.今後のロードマップ.....	60

01

策定の背景

1. 背景
2. 位置付け
3. 課題
4. 検討経過
5. まとめ

第1章 策定の背景

1.背景

近年、世界的に都市空間を車中心から人中心へと転換させる取組※⁴が進展しており、国土交通省では「車中心から人中心の空間形成、沿道と路上の一体活用、地域の多様な主体の活躍により、人々が集い・憩い・多様な活動を繰り広げられる場をつくる」ことを目的としてウォーカブル関連施策を展開しています。現在397都市（令和7年11月30日時点）が国土交通省の取組に賛同する「ウォーカブル推進都市」として登録しており、札幌市もそのひとつです。

「ウォーカブル（walkable）」とは、英語でwalk（歩く）とable（できる）を組み合わせた造語であり、直訳すると「歩ける」ですが、転じて「歩きやすい」や「歩いて楽しい」、「歩きたくなる」などの意味で使われるまちづくり用語です。



イメージ図：国土交通省ウォーカブルポータルサイト



写真：グリーン大通り（東京都豊島区）

札幌市は、令和4年度（2022年度）に長期総合計画である「第2次札幌市まちづくり戦略ビジョン」を策定し、目指すべき都市像として『「ひと」「ゆき」「みどり」の織りなす輝きが、豊かな暮らしと新たな価値をつくる、持続可能な世界都市・さっぽろ』を掲げています。

また、分野横断的に取り組む重要政策としてウェルネス（健康）プロジェクトを設定し、重点施策の一つとして「ウォーカブルシティの推進」を位置付け、居心地が良く歩きたくなり、多様な活動ができる・滞留したくなる空間の形成に向けて、都心・地域交流拠点・住宅市街地それぞれの特性を生かした空間の整備を進めることとしています。

札幌市は今後、人口減少や人口構造の変化により顕在化することが予想される、公共サービスや都市機能の低下などの様々な課題に備えつつ、これまで以上に都市空間の持つ多様な価値に着目し、その質的向上を図っていく必要があります。

※⁴...車中心から人中心へと転換させる取組：自動車交通の利便性を優先してきた都市構造から、歩行者や自転車、公共交通などの移動を重視し、安全・快適で人が主役となる都市空間へ転換すること

2.位置付け

本ビジョンは、目的を、都市空間を車中心から人中心へと転換させ、「歩かざるまち」をつくり、人々の暮らしをより良くしていくことに定め、札幌市が抱える様々な都市課題の解決に寄与するものとして位置付けます。なお、「歩かざるまち」とは、歩いて楽しいといった歩行だけでなく、自転車や公共交通機関等の利用も含めた、自家用車に過度に依存しないまちのことを指します。

本ビジョンは前項に示す長期総合計画「第2次札幌市まちづくり戦略ビジョン」及び、「（仮称）第3次札幌市都市計画マスタープラン※現在策定作業中」に即して策定します。

また、関連する部門別計画は多岐に渡り、令和6年度（2024年度）に策定した人口減少対策計画である「第3期さっぽろ未来創生プラン」では、人口減少緩和戦略のひとつとして「訪れる人・住む人にとって魅力あるまちの推進」を掲げ、「居心地が良く歩きとなる空間形成等」を進めることとしています。

このほかにも、健康政策面では「札幌市健康づくり基本計画 健康さっぽろ21（第三次）」、観光政策面では「第2次札幌市観光まちづくりプラン」など、様々な計画において「歩く」ことの重要性が多角的に位置付けられており、分野横断的に連携を深めながら施策を推進していきます。



図：関連計画等体系図

目標年次は、札幌市の都市空間に係る計画において関係性の深い「（仮称）第3次札幌市都市計画マスタープラン※現在策定作業中」や「（仮称）第3次都心まちづくり計画※現在策定作業中」と整合を図り、概ね20年後の令和27年（2045年）とします。

対象とする範囲は札幌市全域とし、主にパブリックスペースとします。

3.課題

札幌の都市空間における課題を「歩かざるまち」の観点から捉え直し、課題解決の参考となる取組事例と共に5つの観点から整理します。

(1) 健康（ウェルネス）

① 課題

札幌市の健康寿命※⁵は、男性72.08歳、女性74.69歳※⁶となっており、他の政令指定都市と比較して短い状況です。また、肥満者の割合も上昇しており※⁷、加えて、札幌市民の冬期間の外出率は秋と比較して約16%（65歳以上の高齢者は約25%）減少する※⁸ことがわかっています。都市生活における全ての土台となる健康が脅かされることは、身体的健康という直接的な問題だけでなく、心理的・社会的健康においても影響が及ぶ可能性があります。市民の健康を維持・向上するためには、日常生活において欠かせない移動手段の一つであり、手軽に取り入れることができる歩行等の身体的活動を増やすことが重要です。

② 取組事例

歩行による健康促進効果は数多く報告されており、1日10分（約1000歩）の身体活動を増やすことで、生活習慣病発症や死亡リスクが約3%低下する※⁹とされています。また、歩行そのものの身体的健康だけでなく、外出することは心理的・社会的健康において効果があることが報告されており、自然の中を歩くことで、コルチゾール（ストレスホルモン）レベルが減少したり、人と会うことで孤立リスクが軽減したりすることにもつながります。

海外都市の事例においても、イギリス ロンドンでは、車移動を徒歩または自転車に転換させることにより、市民の健康を促進する施策である「Healthy Streets Approach」を推進しており、1日20分の身体的活動量を増やすことで、糖尿病発症率が35-50%低下し、うつ発症率が20-30%低下するとされています※¹⁰。

また、医療費抑制効果に着目すると、国土交通省「まちづくりにおける健康増進効果を把握するための歩行量調査のガイドライン」では、歩行による医療費抑制効果の原単位を0.065～0.072 円／歩／日として提案しています。これは札幌市民1人あたり1日10分（約1000歩）歩くことで、年間約467～518億円の医療費削減が可能となる計算です。



※⁵ ...健康寿命：健康上の問題で日常生活が制限されることなく生活できる期間

※⁶ ...出典：令和元年（2019年）厚生労働省科学研究より

※⁷ ...出典：健康さぽろ21(第2次)最終評価20～60代男性肥満者割合25.3%(2012年)→35.8%(2022年)

※⁸ ...出典：平成18年（2006年）道央都市圏パーソントリップ調査データより

※⁹ ...出典：健康づくりのための身体活動・運動ガイド2023より

※¹⁰ ...出典：ロンドン市交通局提供資料より

(2) 安全・安心

① 課題

近年、国土交通省を中心に子どもの生活空間を守る「こどもまんなかまちづくり」が推進されています。一方、札幌市内の小学生は過去5年間で148件の交通事故に遭っており、うち登下校中の事故が半数以上を占めることが分かっています※¹¹。これらを踏まえ、札幌市では通学路の安全対策を進めていますが、子どもの通行環境を守る取組のさらなる強化が求められています。

また、札幌市では交通事故全体は減少傾向にある一方で、自転車対歩行者の事故が年々増加しています※¹²。矢羽根型路面表示や、自転車利用者へのルール・マナー啓発を進めていますが、「歩道を走る自転車が怖い」「自転車での車道通行中に危険を感じる」という市民の声が多く聞かれるなど、歩行者を守り、さらには自転車利用者を守る安全な通行空間の確保等が求められています。



写真：歩道を走る自転車



写真：通学路の安全を守るスクールガード

② 取組事例

スペイン バルセロナでは、車中心の都市構造を見直し、生活道路を歩行者優先に再構成する「スーパブロック」政策を推進しています。この取組では、9つの街区を一つの単位とし、その内部では車の通行を大幅に制限し、代わりに歩行者や自転車が安全に通行できる空間を確保しています。さらに広場やベンチ、遊び場などを設け、地域の居場所や交流の場としても機能しています。この再編により、歩行者空間が大幅に増加し※¹³、安心して屋外で遊ぶことができる環境が実現されました。また、車の流入が減ったことで騒音や大気汚染も改善され、さらに地域住民による活動やイベントも活発化しています。



写真：再整備後の交差点空間



写真：再整備後の道路空間

※¹¹...出典：小学生の交通事故実態（北海道警察本部交通規制課）より

※¹²...出典：札幌市自転車活用推進計画より（2020年13件、2021年25件、2022年35件）

※¹³...出典：バルセロナ市提供資料より、サン・アントニ地区では歩行者空間が約25,000m²増加

(3) 交流・にぎわい

第1章

策定の背景

第2章

目指すまちの姿

第3章

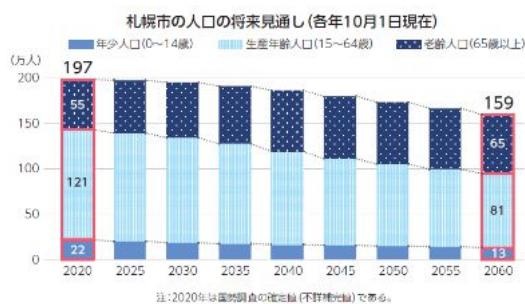
取組・手法

第4章

推進体制 支援策の方向性

① 課題

札幌市の人口は令和3年（2021年）より減少局面を迎え、令和2年（2020年）の国勢調査結果をもとに札幌市が独自に算出した将来推計人口では、令和42年（2060年）には159万人になり、令和2年（2020年）の197万人から38万人減少すると推計しています。また、これまで地域の担い手として多くの役割を果たしてきた町内会の加入率低下も進んでおり※¹⁴、地域活動の担い手確保が喫緊の課題となっています。加えて、かつて地域交流の拠点であった商店街においても組合員数や商店街そのものの数も減少するなど※¹⁵、まちなかの「にぎわい」が失われつつあります。まちなかの交流・にぎわいを維持・創出していくためには、都市空間の再構成やパブリックスペースの利活用によって人の流れと関係性を再生し、暮らしに根ざした交流とにぎわいを生み出すことで、地域経済を活性化させることが重要です。



図：札幌市の人口の将来見通し



写真：歩行者でにぎわう商店街

② 取組事例

地域まちづくりの担い手という観点では近年、エリアマネジメント団体などが町内会等と連携し、パブリックスペースの利活用や交流機会の創出を行っています。厚別区新さっぽろ駅周辺では、駅周辺の再開発を契機に組織された「一般社団法人新さっぽろエリアマネジメント」が、アクティブガーデン（屋外広場）の活用や屋内外施設を活用した「新さっぽろ健康フェス」等を実施しています。

また、ハード面の取組として、アメリカ ニューヨークでは、タイムズスクエア前の街路空間を恒久的に広場化（歩行者天国化）したことにより、歩行者数が11%増加し、商業施設の売上増加率が47%上昇する効果が確認されており、人中心の都市空間への転換が、交流・にぎわい効果を生むことが実証されました。



写真：アクティブガーデンの活用



写真：タイムズスクエア前の広場化

※¹⁴...出典：町内会加入率の現状（札幌市）より、令和元年約83%→令和7年約69%に減少

※¹⁵...出典：商店街数138団体（1990年代）→67団体（2022年）「第二次札幌市産業振興ビジョン」より

(4) 移動

① 課題

札幌市の交通分担率は自動車55.6%、徒歩18.8%、公共交通17.1%、二輪車8.5%※¹⁶であり、自動車移動への依存度がやや高い状況と言えます。障がいや運転免許を持っていない等の理由から自動車の運転ができない方や、公共交通を主な移動手段とする観光客の方々など、誰もが円滑に移動できる公平性の確保※¹⁷の観点から、公共交通を基軸としたまちづくりの一層の推進が求められます。また、冬季には積雪・凍結により徒歩や自転車での移動が難しくなることから、自家用車を運転できない人にとって移動に制限を受ける現状は、経済活動や交流機会の減少、さらには外出頻度の減少に伴う健康面の懸念など、様々な影響が想定されます。超高齢社会の到来等を踏まえると、障がいのある方や高齢者など、移動困難者に対する様々な対策も含め、誰もが円滑に移動することができるまちづくりを進める必要があります。



写真：堆雪により道幅が減少した道路



写真：車いす移動体験会

② 取組事例

フィンランド ヘルシンキでは、公共交通自体のネットワーク強化やダイヤの最適化、乗換のスムーズ化といった利便性向上策に加えて、MaaS（Mobility as a Service※¹⁸）アプリの導入により、地下鉄・バス・シェアサイクル・タクシーなど多様な移動手段を一括で検索・予約・決済でき、「誰もが適切な移動手段を選択し易くする仕組み」を構築した結果、市民の移動選択肢が拡大し、自家用車への依存度が低下しました。行政と民間が連携した先進的な取組として、持続可能な都市交通の実現に大きく貢献しています。



図：MaaSイメージ

※¹⁶...出典：平成18年（2006年）道央都市圏パーソントリップ調査データより

※¹⁷...移動の公平性の確保：年齢、性別、障がいの有無、所得水準などに関わらず、すべての人が安全・快適に移動できる環境を整えること

※¹⁸...MaaS：複数の交通手段を一つのアプリ等で検索・予約・決済まで一括提供する移動サービスのこと

(5) 環境

第1章

策定の背景

第2章

目指すまちの姿

第3章

取組・手法

第4章

推進体制 支援策の方向性

① 課題

札幌市は「ゼロカーボンシティ」を掲げ、2050年までに温室効果ガス排出量を実質ゼロにする目標を示しています。さらに、2050年のあるべき姿として「公共交通を軸としたコンパクトな都市が形成され、歩いて暮らせるまち」や「木のぬくもりを感じながら暮らし、豊かなみどりや自然生態系が守られている」ことを明記※¹⁹しています。都市空間を対象とする本ビジョンにおいても、移動の脱炭素化の観点から、前項に示す「公共交通を基軸としたまちづくりへの転換」に加え、「都市緑化の推進」や「コンパクトな都市づくり」をより一層推進することが重要です。



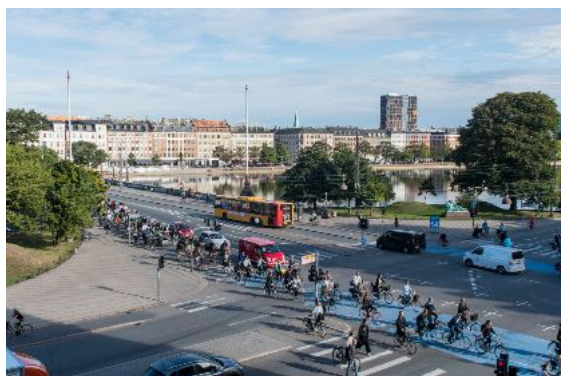
図：2050年のあるべき姿（札幌市環境局）



写真：交通渋滞イメージ（創成川通）

② 取組事例

デンマーク コペンハーゲンでは、都市交通と都市緑化の両面から脱炭素化を推進しています。交通分野では、電動バスや再生可能エネルギーを活用した移動手段を導入し、2022年時点の自転車道の総延長は約400km整備され、自転車通勤・通学率は45%に達し、住民一人当たりのCO₂排出量は2010年と比較して約21%削減されました※²⁰。加えて、都市緑化にも力を入れ、街路樹の植栽や雨水を活用したグリーンインフラ整備により、ヒートアイランド現象の緩和や生物多様性の保全にも貢献しています。都市全体の温室効果ガス排出削減とあわせ、快適で持続可能な都市空間を実現しています。



写真：コペンハーゲンの自転車通行空間



図：グリーンインフライメージ（国土交通省）

※¹⁹...出典：札幌市気候変動対策行動計画より

※²⁰...出典：コペンハーゲン市モビリティレポート2023より

4.検討経過

本ビジョンの策定にあたり、検討段階から幅広く市民参加機会を設けるため「サッポロウォーカープロジェクト」と題して、市民ワークショップやシンポジウム、各地域における市民公募型実証実験及びフィールドワークを実施しました。また地域交流拠点「宮の沢」では市民参加型デジタルプラットフォームを北海道内で初めて活用し、特に若年層の継続的な意見収集も実現しました。

市民ワークショップでは、「地下鉄駅などの拠点部周辺に、誰でも気軽に使える休憩・交流スペースがあるといい。」「大通公園や豊平川など、緑地や水辺空間を活用することで、より自然との共生を感じられると思う。」「普段あまり活用されていない広場等で、キッチンカーなどを常設できるとコミュニティ形成につながる。」「自転車が通行しやすい環境（現在は危険を感じる）ができ、シェアサイクルのポートももっと増えてほしい。」「全ての人にとって移動しやすいユニバーサルな街にしてほしい。」「冬や雪の良さを安心して味わうために屋内施設との連携を充実させてほしい。」「観光客にとっては自然の雪そのものが資源で歩きたくなる要素。」「ありのままの雪に触れられる場所も貴重。」などの意見をいただきました。



写真：サッポロウォーカーシンポジウム2024

市民公募型実証実験では、平岸、宮の沢、真駒内の3地域において実証実験を行い、終了後には実施団体によるワークショップを行い、パブリックスペースの活用に関して様々なご意見をいただきました。「パブリックスペース活用に関する手引き（ガイドライン）があると良い」「道路使用許可・占用許可等の手続きが煩雑だったため、一括で行えるワンストップ窓口が設置されると良い」「札幌市が貸し出せる物品情報の公開や、その保管場所が確保されると良い」「各地域でまちづくりに取り組んでいる団体同士の交流の場があると、アイデアが出やすくなるのではないか」「パブリックスペースを活用する際に、要件の緩和があると良い」といった声が聞かれました。



図：実施団体による成果報告会プログラム資料（抜粋）

また、市役所外部においても、有識者7名からなる「札幌市ウォカブルビジョン策定検討委員会」を設置し、約2年間（全5回）にわたり多角的に議論を進め、国内外の最新事例なども含めて本ビジョンの検討に生かしてきました。



写真：有識者7名が参加したシンポジウムの様子

さらに本ビジョンは、都市政策に関わる様々な部署と分野横断的に検討し、推進していく必要があることから、札幌市役所内に副市長を本部長とする「札幌市ウォカブル推進本部会議」を設置しました。本部会議では、観光・交通・健康・景観・道路管理・都市計画など、多岐に渡る関係部門が参加し、庁内一丸となって札幌市の目指す姿や関連施策について議論を重ねてきました。



写真：推進本部会議の様子



図：推進本部体制イメージ

このほかにも、官民協働によるビジョン検討の取組として、令和6年7月に開設した札幌市官民連携窓口（SAPPORO CO-CREATION GATE）への提案を契機として、「一般社団法人新さっぽろエリアマネジメント」と共催で冬のウォカブル施策に関する実証実験を実施したことや、SAPPORO DX WEEK2024において民間企業数社から成る検討チームからの政策提言をいただくなど、これまで様々な主体のみなさまと協働で検討を進めてきました。



写真：SAPPORO DX WEEK2024



写真（中央・右）：新さっぽろ冬の社会実験における屋外活用



5.まとめ

第1章では、「Well-Moving City SAPPORO 2045 ビジョン」の策定に至る背景として、札幌市が直面する様々な都市課題や社会環境の変化、さらには市民のみなさまとの対話を通じて得られた多くの気づきを振り返りました。5つの課題として取り上げた「健康」「安全・安心」「交流・にぎわい」「移動」「環境」には、それぞれ別々に見えても、その根底にはパブリックスペースという、誰でもアクセス可能な都市空間を単なるインフラではなく、本来の意味での公共空間（みんなの空間）として捉え直す、という共通のテーマが存在しています。

また20年後の札幌を考えた時に、今後さらに情報技術が進展し、オンラインで完結することがいま以上に増えることが想定されます。そのような時代にパブリックスペースに求められる機能とは何なのか。それは実空間における人との偶発的な出会いや、札幌の魅力である明瞭な四季を五感で感じられる暮らしそのものではないでしょうか。思わず繰り出したくなる街こそが、人々に選ばれる魅力的な街だと考えます。

したがって本ビジョンでは、都市空間を「歩かざるまち」へと転換し、市民の暮らしそのものをより良くしていくため、都市空間における車中心の既存の価値観を見直し、パブリックスペースのあり方を人中心に再定義することを目指します。それは、単なる都市整備ではなく、市民とともに未来の暮らしをつくる挑戦でもあります。

次章からは、その新たな考え方と札幌の未来への意志を、札幌独自の都市空間コンセプト「Well-Moving City SAPPORO」という言葉に込めて具体的に描いていきます。市民・行政・企業・大学など、多様な主体が共に連携しながら、人々が動き、つながり、安心して暮らせるまちを実現していくための出発点とします。



写真：休日に広場で踊る住民（バルセロナ）



写真：車道から転換した広場（バルセロナ）

コラム：「世界のウォークブルシティ（パリ、バルセロナ）」

第1章

策定の背景

第2章

目指すまちの姿

第3章

具体的な取組・手法

第4章

推進体制・支援策の方向性

(1) パリ（15分都市）

「15分都市」は、パリ市が提唱する都市の新たなあり方で、自宅から徒歩15分（自転車であれば5分）以内に、必要な都市機能（職場、学校、医療施設、食料施設など）にアクセスできる生活環境を整備する構想です。移動に多くの時間を費やしている現代の都市生活を見直すことで個人の自由な時間を増やすことや、車中心から人中心の移動環境を充実させることで、環境にも配慮した持続可能なまちづくりを推進することを目的としています。アンヌ・イダルゴ市長のもと推進されている本構想は、持続可能な都市計画の一例として世界的に注目を集めています。



図：15分都市イメージ図（パリ市提供） 図：15分都市イメージ図（パリ市提供）

(2) バルセロナ（スーパーブロック／緑の軸線）

「スーパーブロック」とは、大気汚染や騒音などの都市環境の改善と住民生活の質向上を目的とした都市政策であり、具体的には、一辺が約133mの正方形で形成される区画を9つでひとつの大きな街区（スーパーブロック）と捉え、内部への自動車進入を抑制（10km/h規制）し、ブロックの外周を通行するように促すものです。またその内部を歩行者や自転車のための空間として確保し、さらに公園化をはじめとした緑化を進めることで、市民の安全で快適な生活を実現しています。

また、近年ではブロック単位での整備を進める以外に「Green axis（緑の軸線）」や「Green hub（緑の広場）」の整備を急速に進めています。その名前のとおり緑化が進む空間であり、路面はフルフラット構造となっています。自動車も通行が可能ですが、低速（10km/h規制）で走行するため危険性が低く、まさに歩行者中心の道路空間が実現されています。



写真：再整備後の交差点空間



写真：Green axis（緑の軸線）

02 目指すまちの姿

1. 都市空間コンセプト
「Well-Moving
City SAPPORO」
2. 重点方針
3. 各エリアの目指す姿

第2章 目指すまちの姿

第1章

策定の背景

1.都市空間コンセプト「Well-Moving City SAPPORO」

第1章を踏まえ、20年先を見据えた札幌独自の都市空間コンセプトを設定します。誰もがイメージしやすい言葉で都市空間を表現し、札幌の都市空間に関わる人々の共通のビジョンとなるよう、大切に使い続けていきます。

Well-Moving City SAPPORO

～ いつでもどこでも誰もが心地よく、心も一緒に動くまち ～

第2章

目指すまちの姿

第3章

具体的な
取組・手法

第4章

推進体制
支援策の方向性



イメージ図：都市空間コンセプトと5つの重点方針

春夏秋冬、地上も地下も、ここに住む市民はもちろん、
一時的な来訪者でも、いつでもどこでも誰もが心地よく、
心も一緒に動くまち、札幌。



「Well-Moving」という言葉は身体的、精神的、社会的に良好な状態であるWell-Beingに「歩かざる」をかけた札幌独自の言葉です。この都市空間コンセプトには、単に人やモノの移動だけでなく、「Moving」には“感動”や“心の揺れ”という意味を込めています。

雪と共に生きる札幌だからこそ、地上も地下も、四季折々の風景のなかで、誰もが自然と「歩かざる」。その動きのなかに懐かしさや出会い、発見や共感が生まれる。暮らす人も訪れる人も、このまちで五感をひらき、歩くことが喜びになる。そんな札幌発の“**心も一緒に動くまち**”を目指します。

【イメージパースの解説】

- 春) ・桜並木を眺めながら老夫婦が肩を並べて歩いている (景観×バリアフリー)
- ・歩道上の滞留空間で地域住民が井戸端会議をしている (道路空間の活用)
- 夏) ・居心地の良い緑陰のものでオープンテラスを楽しんでいる (緑化×空間活用)
- ・道路等で様々なイベントが行われ偶然の出会いに溢れている (バスキング制度)
- 秋) ・水辺空間や落葉など子どもたちが自然に触れながら遊んでいる (遊び場の確保)
- ・ひとりベンチに座り、紅葉や読書を楽しんでいる (多様な滞在空間の確保)
- 冬) ・雪×灯りが織りなす景観を、来街者が楽しみながら歩いている (景観誘導)
- ・観光客が雪像の写真を撮ったり、自然の雪に触れて遊んでいる (観光×雪)

2.重点方針

第1章

策定の背景

都市空間コンセプト「Well-Moving City SAPPORO」を明確に推進するため、重要な要素を5つに分類し、行政だけでなく札幌の都市空間に携わる誰もが大切にするべき観点を重点方針として設定します。重点方針に基づく取り組みが相互に影響を与え合いながら各地域の魅力を高めていくことによって、“心も一緒に動くまち”を目指していきます。さらに、5つの重点方針について計測可能で明確な評価軸を設定し、ハード・ソフトを問わず施策効果の可視化や、関係者同士の合意形成などに活用することを目的として、評価手法を今後検討します。

第2章

目指すまちの姿



第3章

具体的な取組・手法

第4章

推進体制の支援策の方向性

(1) 「歩くことが楽しく、健康に暮らせる」

「歩く」ことは、単なる移動手段に留まらず、歩行者にとって心身の健康を支える日常的な営みであり、まちの魅力を体感する行為でもあります。このため、歩道の整備や段差解消といった基本的なインフラ確保に加え、まちなかを歩くこと自体を「楽しさ」や「発見」につなげる要素、すなわち「歩かざる」仕掛けの導入が重要です。

具体的には、アイレベル※²¹で視界を楽しませるアートや植栽、カフェのテラス席や商店街のにぎわいなどを通じて、歩行者の興味を引き出すことが求められます。

また、歩行による身体の活性化が生活習慣病予防にもつながることから、ベンチ等の休憩施設をまちなかに配置し、誰もが自身のペースに合わせて無理なく健康づくりができる環境を整えることも重要です。

さらに、現在市内各地で行われているウォーキングイベントや観光まち歩きなどのソフト事業と連携し、そこから得られるフィードバックをハード整備に活用することで、ハードとソフトが相互に作用し合い、地域の魅力を高める都市空間を形成していきます。



写真：シャンゼリゼ通りのテラス席（パリ）



写真：鉄道廃線跡地を活用した空間（パリ）

※²¹...アイレベル：道路空間だけでなく、沿道建物の低層部など歩行者の目線に入る部分のこと



歩くことが楽しく、
健康に暮らせる

(2) 「居心地が良く、自分らしくいられる居場所がある」

都市空間には「気軽にいられる場所」が必要です。誰もがパブリックスペースに対してにぎわいを求めているわけではない、ということ認識し、カフェや商業施設のようなサービス体験や消費活動を前提とした空間だけでなく、屋内・屋外問わず何かをしなくても居られる“余白”のある場として、ベンチで本を読む、子どもと過ごす、友人と語る、ひとりでぼんやりする、こうした多様な過ごし方を受け入れる居場所こそが、まちの居心地の質を高めます。札幌の都市空間の中で、誰にとっても自分らしくいられる居場所が点在していることは、市民の幸福感を高めるうえで欠かせない条件です。

さらに都市空間は「偶然の出会い」を生む重要な場でもあり、自宅と職場・学校以外に人同士が交流する場（サードプレイス）としての役割も大変重要です。

パブリックスペースで人々が様々な活動を共有して、顔の見える関係性を築いていくことのできる空間も併せて推進していくことで、多様なニーズを受け止める都市空間を形成していきます。



写真：車道から転換した広場空間（バルセロナ）



写真：誰もが自由に過ごせる空き地空間



(3) 「札幌らしく、四季を通じて歩かざる」

札幌の都市空間の特性の一つとして「季節の表情が豊か」であることが挙げられます。春の桜と梅が同時に咲く様、夏の澄んだ空気とみどり、秋の色彩、そして冬の雪景色、これらが日々の移動やまち歩きを彩る資源であり、都市の魅力でもあります。

しかしその一方で、特に冬季は寒さや積雪によって移動が困難になり、外出そのものが減少する傾向が見られます。したがって札幌の歩行空間には、四季を生かし、かつ乗り越えるための工夫が求められます。

例えば都心部では、地下ネットワークや沿道施設との連携などを通じて冬季も歩きやすい空間を創出することが重要です。また札幌市では毎年、市民・企業・行政など多様な主体によって約3万個のスノーキャンドルやアイスクャンドルが製作されていることがわかっています。冬季の景観向上や、製作作業を通じた交流機会の創出などの効果があることから、これまで引き継いできた冬の文化を大切に繋いでいくことが求められます。このように、雪を資源と捉えることで、雪が弱みではなく強みとなる都市空間を形成していきます。



写真：春のサイクリングロード



写真：札幌駅前通のイルミネーション



写真：市民が製作したスノーキャンドル



写真：秋の中島公園

札幌らしく、
四季を通じて
歩かざる



(4) 「誰もが安心して、円滑に移動できる」

札幌市に暮らす人や訪れる人にとって、「安心して円滑に移動できること」は最も基本的で重要な要素です。例えば、国土交通省を中心に子どもの生活空間を守る「こどもまんなかまちづくり」が推進されており、札幌市においても、通学路を中心として、さらなる安全対策の強化が重要です。また歩行者だけでなく自転車通行空間の安全・安心を確保する必要性から、道路空間の再配分等により、これまで車道中心であった空間を歩行者や自転車中心の空間へ転換していくことや、過度に自動車に依存しないよう公共交通の利用を促すことが求められます。

誰もが安心して、円滑に移動できるまちづくりにおいては、高齢者、障がいのある方々、ベビーカーの利用者、観光客など、様々な方がストレスなく、安全で快適に移動できることが重要です。そのため、移動経路や建築物のバリアフリー化に加えて、わかりやすい案内サインの設置やスマートフォンを活用した情報発信、心のバリアフリーの推進など、官民連携によるユニバーサル※²²なまちづくりを進めていく必要があります。

ユニバーサルなまちづくりの推進にあたっては、文化・言語・国籍の違い、老若男女と言った差異や、障がい・能力を問わずに利用できるよう配慮された設計（デザイン）を指す「ユニバーサルデザイン」の考え方の積極的導入が不可欠です。

また、ハード・ソフトを問わず個々の事業推進に際しては、誰もが安全・安心に利用及び参加できるよう、事業計画の初期段階から積極的に当事者参画を進め、様々な利用ニーズ等を聴取しながら取り組みを進めていく必要があります。

こうした取組を通じて、札幌市が目指す「誰もが互いにその個性を尊重され能力を発揮できる、多様性と包摂性が強みとなる社会」を形成していきます。



写真：段差の無い横断歩道（バルセロナ）



写真：歩行者専用に変換した通学路（パリ）

※²²...ユニバーサル：第2次まちづくり戦略ビジョンにおけるまちづくりの重要概念の1つで、誰もが多様性を尊重し、互いに手を携え、心豊かにつながる。また、支える人と支えられる人という一方向の関係性を超え、双方向に支え合うこと



(5) 「環境に優しく、みどりとともに暮らせる」

札幌の魅力である「みどり」は、良好な景観形成、生物の生息・生育の場の提供、健康・レクリエーション等の場の提供、延焼防止、地球温暖化防止など、環境面、地域振興面、防災・減災面において多様な機能を有しています※²³。

さらに、次の世代に魅力的な都市空間を引き継いでいくため、札幌市が目指す「ゼロカーボンシティ」の実現に向けて、「移動の脱炭素化」や「都市緑化の推進」「コンパクトな都市づくり」を進めていくことが重要です。また、国土交通省では、「道路分野の脱炭素化政策集」を公表しており、「低炭素な人流・物流への転換」を「基本的な政策の柱」と位置づけ、ハード整備と利用促進のためのソフト施策を両輪として、新たなモビリティ、公共交通、自転車、徒歩等の低炭素な移動手段への転換を促進し、国内のCO₂排出量の約18%を占める道路分野※²⁴について、中期目標として、2030年度において、温室効果ガスを2013年度から46%削減することを目指しています。

札幌市においても、公共交通の利用促進や、道路空間の再配分等による自転車通行空間の確保等により、自家用車に過度に依存しないまちづくりへの転換を図ることが求められます。さらに交通面の対策のみならず、コンパクトな都市づくりによる「歩いて暮らせるまち」を推進することが重要です。

こうした取組を通じて、人々が多様な機能を有する「みどり」を身近に感じながら暮らすことができる、持続可能な都市空間を形成していきます。



写真：道路空間の緑化（バルセロナ）



写真：エッフェル塔付近の緑化（パリ）



写真：自転車の利用促進（道路分野の脱炭素化政策集より）

※²³...出典：札幌市「都心のみどりづくり方針」より

※²⁴...道路分野：道路利用約15.9%、道路整備約1.3%、道路管理約0.5%の合計

環境に優しく、
みどりとともに暮らせる



3.各エリアの目指す姿

第1章

策定の背景

第2章

目指すまちの姿

第3章

具体的な 取組・手法

第4章

推進体制 支援策の方向性

「Well-Moving City SAPPORO」の実現を目指し、特性の異なる「都心」「地域交流拠点」「住宅市街地」の3つのエリアそれぞれについて、目指す姿を設定します。

ただし、各エリアにおける目指す姿は画一的なものではありません。季節や時間帯、そして人それぞれの違いに応じて変化する人々の活動に焦点を当て、具体的な複数のシーン（風景）を描き出します。これら多様なシーンの集合体こそが、本ビジョンが示す目指す姿となります。

(1) 都心の目指す姿

都心における目指す姿を設定するにあたり、「Well-Moving City SAPPORO」の実現に向けて、都心エリアが果たす役割を整理します。



図：「第3次都市計画マスタープラン」における分類（都心）

① 「都心」が果たす役割

都心は札幌の「顔」であり、都市のアイデンティティと国際競争力を象徴する中枢的空間です。「Well-Moving City SAPPORO」においては、都心エリアが、歩いて魅力を実感できる最先端の象徴空間として機能することが期待されます。ビジネスや観光といった多様な都市機能が凝縮され、同時にそれらを「歩くことで体験できる空間」に転換していく必要があります。

たとえば、札幌駅前通や大通公園など、特に札幌を象徴するパブリックスペースにおいては、時代に合わせた更なる魅力向上を図ることが求められます。また、四季を通じて快適に移動できる地上・地下の重層的な歩行ネットワークの充実による回遊性の向上や、中通りに着目した新たな魅力づくりも、都心部における重要な役割です。

札幌市民だけでなく、多様な来訪者にとって特別な体験ができる都市空間の形成を進めることで、都心はより魅力的な象徴空間となり、世界に向けた「札幌らしさ」を発信する基盤となっていきます。

② 「都心」の目指す姿

巡るたび、また巡りたくなる。
好奇心の積もる街並み。

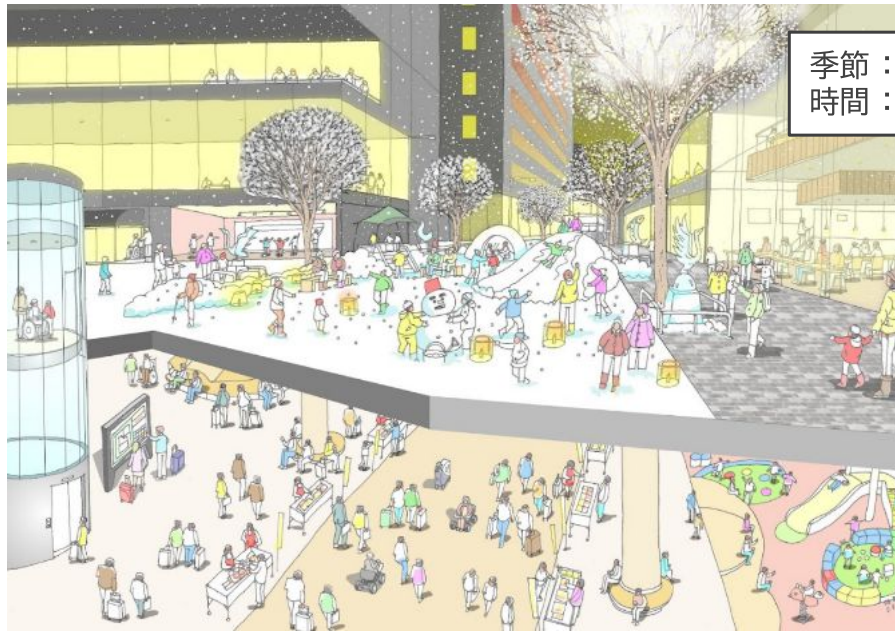


この街は、いつ訪ねても、何度訪ねても面白い。
気持ちの良い風を感じて歩いても、
ぬくもりを求めて深く潜っても、
そこには必ず、思いがけない出会いがある。

【イメージパースの解説】※初夏／昼間（休日）

- ・ストリートと一体となった沿道空間では、オープンカフェや広場活用など、新たな出会いの場にもなっている
- ・交通環境が整備され、荷捌きや人々の乗降など、都市活動が円滑に行われ、誰もがストレスなく過ごしている
- ・沿道施設における低層部の賑わいが、歩いて楽しい街路空間の一部となっている
- ・都心を訪れる買い物客、学生、高齢者、ビジネスパーソン、家族連れ、観光客、障がいのある方など、誰もがそれぞれの好奇心を持ち回遊したくなるような魅力的なストリートが形成されている
- ・休憩施設が充実しており、誰でも気軽に休み、交流することができている

③ 地上と地下を最大限に活用して季節を楽しんでいる風景



この街の冬にはいろんな色がある。
青空の下、ピリッと冷えた空気を吸い込み、季節を感じて歩くとき、
常緑の温もり溢れる空間で、無為な時間を過ごすとき、どんなときでも、
老若男女、人それぞれに、思い思いに、どこかに居場所を見つけられる。
四季を通じて楽しめる街並み。

④ 魅力的な沿道・歩道空間で誰もが日常を楽しんでいる風景



道と街の境界線を、みどりとゆとりが緩やかに繋ぐ。
道行く人も、働く人も、くつろぐ人も、もてなす人も、
みんながそこで自然に交わり積み重なったにぎわいが、心地の良い喧噪を生む。
視線を向けた光景すべてが、切り取りたくなる、ユニークで楽しい街並み。

(2) 地域交流拠点の目指す姿

地域交流拠点における目指す姿を設定するにあたり、「Well-Moving City SAPPORO」の実現に向けて、地域交流拠点エリアが果たす役割を整理します。



図：「第3次都市計画マスタープラン」における分類（地域交流拠点）

① 「地域交流拠点」が果たす役割

地域交流拠点は、市内の各生活圏域を支える地域のハブ的な役割が求められます。「Well-Moving City SAPPORO」においては、地下鉄駅やバスターミナル、区役所など多様な機能が集積するこのエリアが、豊かな生活環境を支える拠点として機能する必要があります。

特に「第2次札幌市立地適正化計画※現在策定作業中」においては、地域交流拠点など都市の拠点となるエリアに都市機能誘導区域を定め、誘導施設の集積に向けた各種誘導施策を講じることとしており、誘導効果を相乗的に高めるためにも、周辺道路や広場等のパブリックスペースにおいて、人々の交流が誘発される仕掛けや回遊性を向上させる取組を推進することが重要です。

都心のような高度機能の集積ではなく、特に「日常に根差したにぎわい」に着目し、市民の愛着と地域力を支える「人々の顔の見える地域拠点」としての役割を担います。

② 「地域交流拠点」の目指す姿

行きも帰りも寄り道せずにいけない。
賑わい、出会いのターミナル。



近頃移動がスムーズで、行きも帰りも余裕が出来た。
空いた時間で、寄り道しよう。
今日はどんな魅力溢れるヒト・モノ・コトに出会えるだろうと、
笑みがこぼれた。

【イメージパースの解説】※夏／昼間（休日）

- いつもの駅前広場で、いつも何かやっている。偶然の出会いと人々の笑顔が生まれる仕掛け（テラス、広場活用）
- プレイス機能に特化したストリートでは、滞留できるベンチや植栽、アートなど、居心地がよく楽しめる施設が整備されている
- エリアマネジメント団体等による、地域に密着したイベントが行われている
- 誰もが移動しやすいターミナルとして、バリアフリー化や最適な動線が組まれている

③ 快適に移動ができ、待ち時間さえも楽しんでいる風景



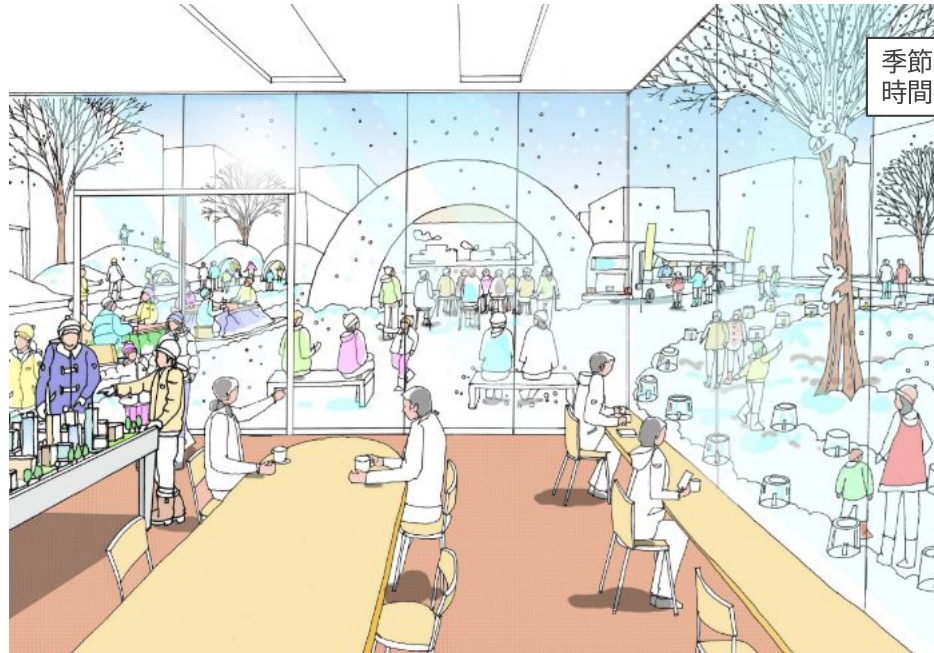
毎日の通勤、通学、買い物も、出張、観光、初めてとなる訪問も、あらゆる流れが整えられて、快適に移動ができる過ごしやすい街。乗り換えで空いた時間や、待ち時間さえ楽しめる、様々な街の仕掛けが、市全体の魅力をつなげ、高めるための要となる。

④ 自然と歩みが遅くなり、思わず寄り道をしてしまう風景



この街を訪れたなら、寄り道せずにいられない。
道路まで溢れ出す街の魅力に、自然と歩みが遅くなる。
食事に買物、面白そうなイベントも、少し歩けばみどりを楽しむことさえ出来る。
今日はどこに寄り道しよう。日々の移動に彩りを加える、地域の交流拠点。

⑤ 屋内外を行き来しながら冬を満喫している風景



冬はどうしても、屋内に籠もりがちになるもの。
それならば、籠もれる場所にバリエーションを。
冬の街から、温もりのある屋内へ。
食事や買い物、イベントを一通り楽しんで、暖まったらまた外へ。
雪を楽しみ、限界が来たら、次の場所。
そうして自然と、冬を楽しむ人たちが集まっていく。

(3) 住宅市街地の目指す姿

住宅市街地における目指す姿を設定するにあたり「Well-Moving City SAPPORO」の実現に向けて、住宅市街地エリアが果たす役割を整理します。



図：「第3次都市計画マスタープラン」における分類（住宅市街地）

① 「住宅市街地」が果たす役割

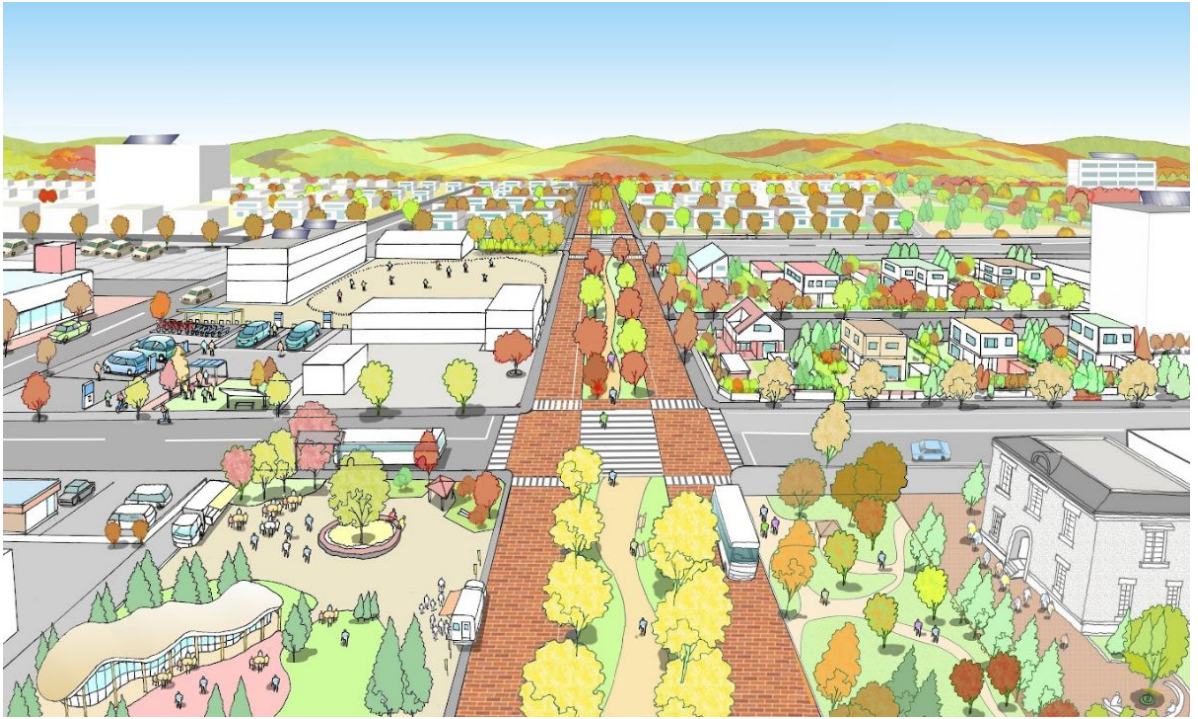
住宅市街地は、札幌市民の暮らしの基盤であり、まち全体のウェルビーイングを支える最も広域かつ根幹的な空間です。「Well-Moving City SAPPORO」においては、誰もが安全に、自然と歩かざる「日常の風景」をつくることが目標です。

複合型高度利用市街地では、商業施設、駅へのアクセス性が高く、歩いて完結するライフスタイルを支える機能集積と空間整備が求められます。一般住宅地や郊外住宅地においては、安心して歩ける歩道整備、通学路の安全、コミュニティ空間としての公園や緑道の活用、冬の歩行環境対策が重要となります。

また、子ども・高齢者・障がいを持つ方など多様な市民が安心して出歩ける都市空間を整えることが、このエリアにおける最も重要な要素です。地域内での安全・安心な徒歩移動が可能になることで、生活の質の向上と地域社会の利便性向上を同時に図る役割を果たします。

② 「住宅市街地」の目指す姿

自分らしく、気兼ねなく、出かけ愉しむ。
自然が彩る心地よい暮らし。



朝、カーテンを開けると、遠くに見える山の緑が萌えていた。
だから、今日はいつもの道を、徒歩で来たんだ。
すれ違うこどもたちの笑い声が、少しだけ大きく聞こえた。

【イメージパースの解説】※秋／昼間（休日）

- ・札幌の魅力である自然に気軽に触れながら、心地よく歩ける散歩道がある
- ・地域の歴史・景観資源を活かした歩きたくなる空間が形成されている
- ・誰もが安全に、自分らしく居られると感じる場所がある（身近な公園）
- ・モビリティハブがあり、気軽に交通にアクセスできるような環境が整っている

③ 子どもも親も安心して楽しく歩ける通学路の風景



子どもたちが毎日歩く通学路。
安心、安全はもとより、学校に行くため、
出かけることそれ自体が、楽しみとなる様々な仕掛け。
それは、子どもたちだけでなく、この街に住む誰もが、安心、安全に、
気兼ねなく出かけたくなる街の雰囲気を作っている。

④ 誰もが思い思いに過ごしている身近な公園の風景



誰もが自由に利用できる公園は、誰もが思い思いに過ごせる場所。
子どもたちの遊ぶ声。キッチンカーでランチ。
健康づくりの運動も。ひとりでも、みんなでも。
絶え間なく賑わう広場を見渡せば、誰もが充実した表情だ。

コラム：「第3次都心まちづくり計画に位置付ける主要検討路線等」

第1章

策定の背景

第2章

目指すまちの姿

第3章

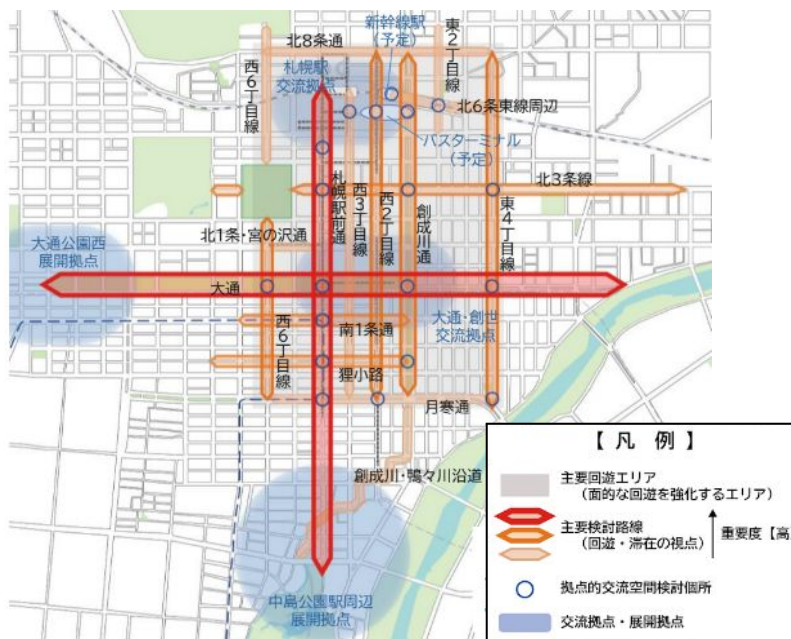
取組・手法的な

第4章

推進体制 支援策の方向性

(1) 主要検討路線等の選定

都心のまちづくりの指針である「第3次都心まちづくり計画」において、都心のウォーカブル施策の推進にあたっての取組の方向等を示しています。また、面的な回遊を強化する「主要回遊エリア」、主要施設や魅力的な目的地、駅などを結び、回遊・滞在機能の強化に向けて検討を進める「主要検討路線」等を設定しています。



(2) 主要検討路線等における今後の検討の考え方

上記の主要検討路線等について、それぞれの通りに求められる機能や重要度等を踏まえて、市民や地域の関係者等と将来像を共有しながら、取組を検討・推進します。

また、取組の検討にあたっては、以下の検討の方向を踏まえるとともに、回遊・滞在機能と交通機能のバランスに配慮し、相乗効果が発揮されるように考慮します。

凡例	主な検討の方向	(参考事例)
 主要検討路線	●人中心の魅力的なストリートの実現に向けて、道路と沿道が一体となった空間形成を目指し、ハード・ソフトの両面から取組を推進	 西6丁目交差点周辺 (札幌市)  相生通りトランジットパーク構想 (カミハチキビル)
	●四季を通じて安全・安心な歩行環境の充実を図るため、まちづくりの動向等を踏まえて、地上・地下の重層的な歩行者ネットワークを拡充	 西6丁目地下歩道 (福岡市)  紙谷町シャレオ (広島市)
	●歩行者・自転車の通行や沿道へのアクセス環境に配慮しつつ、既存の道路空間や沿道空間を有効活用	 南1条通社会実験 (札幌市)  シャワー通り社会実験 (札幌市)
 拠点的交流空間検討箇所	●地域の活動や回遊を生み出す拠点として、骨格軸等の主要な通りの結節点において、公民が連携して魅力的な空間を創出	 狸二条広場 (札幌市)  創成川公園 (札幌市)

03 具体的な取組・手法

1. 取組・手法例
2. リーディングプロジェクト
3. モデルケースの紹介

第3章 具体的な取組・手法

第1章

策定の背景

第2章

目指すまちの姿

第3章

取組・手法

第4章

推進体制
支援策の方向性

1.取組・手法例

第2章で示した、札幌が目指す都市空間のコンセプト「Well-Moving City SAPPORO」を実現するため、第3章では具体的な取組や手法例を紹介します。5つの重点方針に基づき整理し、効果的なエリアや実施主体も明確に示すことで、具体的な行動へとつなげることを目指します。

■ :主に有効と考えられる
エリア及び実施主体

(1) 歩くことが楽しく、健康に暮らせる

- 「建物低層部等のにぎわい用途導入や休憩・滞在空間の整備」

(概要)

建物低層部等に、来街者など誰もが気軽に利用できる、店舗や飲食店等を配置し、そのにぎわい用途と一体的に機能する質の高いオープンスペース※²⁵を整備

(効果)

低層部ににぎわい用途を配置することで、まち歩きが楽しくなり、さらにオープンスペースが整備されることで、安全で快適な歩行・滞在空間を創出

都心	拠点	住宅
行政	企業	地域



- 「地域住民やオフィスワーカー等の憩いの場を創出する歩行・滞在空間の整備」

(概要)

民間の商業施設や業務施設を建設する際、オープンスペースの魅力を高めるため1階部分にガラス張りの店舗を入れることや、歩道沿いに広場を設け、緑化や休憩施設を設置

(効果)

1階店舗と連携した広場を設けることにより、快適な歩行空間の確保や、地域住民、周辺のオフィスワーカーの憩いの場を創出

都心	拠点	住宅
行政	企業	地域



- 「自然に触れ、心地よく歩くことのできる遊歩道の整備・メンテナンス」

(概要)

今までの自動車を主体とした道路利用を見直し、都市の中におけるみどりを基調として、その中に“みること”“すること”を中心とした遊歩道、自転車道、大小の広場を整備

(効果)

歩行の連続性を保つため交差点を閉鎖して車の乗り入れを出来るだけ抑えることにより、周辺住民の安らぎと憩いの空間を創出

都心	拠点	住宅
行政	企業	地域



※²⁵...オープンスペース：建築基準法に基づく公開空地や、都市計画法等に基づくその他の空地

- 「工事用仮囲いを活用したミューラルアート（壁画）の設置」

（概要）

再開発の進む札幌都心部において、長期間にわたって、歩行者が目にするようになる工事用仮囲いにミューラルアート（壁画）を設置

（効果）

質の高いアートを制作過程も含めて広く公開することで、通行人の愛着が形成され、遠回りしてでも歩かざる、楽しい歩行空間を創出

都心	拠点	住宅
行政	企業	地域



第1章

策定の背景

- 「地域の魅力を生かしたウォーキングマップの作成やイベントの実施」

（概要）

市内各地の歴史や文化など、地域の魅力を再発見することのできるウォーキングマップの作成・更新や、様々な運営主体によるウォーキングイベントを開催

（効果）

市内各地の歴史や文化などに触れるウォーキングコースを実際に歩く各区主催のウォーキングイベントに多くの市民が参加し、ウォーキングを通じた健康への取組に寄与

都心	拠点	住宅
行政	企業	地域



第2章

目指すまちの姿

- 「パブリックスペースにおける健康活動イベントの実施」

（概要）

地域住民が集まり、公園や広場等のパブリックスペースにおいてフィットネスに参加することや、イベント等を自ら企画して開催

（効果）

令和7年7～9月の「まちなかラジオ体操」や、9月の「NoMaps WELLNESS」では、都心の公共空間で多くの市民がフィットネス企画に参加し、健康の増進に寄与

都心	拠点	住宅
行政	企業	地域



第3章

具体的な
取組・手法

- 「観光まち歩きを促進する情報発信」

（概要）

まち歩きガイド『サッポロコンシェルジュ』や観光モデルコース『SAPPOROぶらり手帖』の情報発信を行うとともに、インバウンドを対象としたガイドツアーを造成

（効果）

観光客のまち歩き促進という直接効果だけでなく、札幌の歴史・文化など、札幌ならではの観光コンテンツを魅力的に発信できる質の高い観光ガイド人材育成にも寄与

都心	拠点	住宅
行政	企業	地域



第4章

推進体制
支援策の方向性

(2) 居心地が良く、自分らしくいられる居場所がある

- 「季節や天候を問わず利用できる質の高いオープンスペースの整備」

(概要)

民間開発等を契機に、訪れる人のニーズに応じて多様な使い方ができるオープンスペースを整備

(効果)

令和6年9月に行った道庁南エリア研究会による社会実験では、質の高い滞留空間の設置により、通常時と比べて滞在者数が約1.6倍に増加し、居心地の良い空間創出に貢献

都心

拠点

住宅

行政

企業

地域



- 「自由に過ごすことができ、偶然の出会いを生むオープンスペースの空間活用」

(概要)

拠点部等のオープンスペースを活用して、普段は通行するだけの空間を、自由に過ごせる滞在施設の設置や、地域の企業・周辺住民等による様々な空間活用イベントを実施

(効果)

令和6年11月に地域交流拠点宮の沢で実施した社会実験「グルメとまなびの散歩道」では、親子連れを中心とした多数の来場者があり、継続的な空間活用を望む声が多数

都心

拠点

住宅

行政

企業

地域



- 「誰もが自分らしく居られる、身近な公園の整備」

(概要)

地域に身近な公園にそれぞれ役割を持たせて機能を分担(地域の核、機能特化、その他)し、毎年30箇所程度の再整備を実施

(効果)

令和6年度のアンケート調査では公園周辺の住民の約7割が「公園の印象が良くなった」と回答があり、自分らしくいられる居場所づくりに貢献

都心

拠点

住宅

行政

企業

地域



- 「パブリックスペースを活用した地域密着型のお祭りイベント」

(概要)

地域住民による公共的空間を活用したお祭りイベント等を継続的に実施し、低未利用エリアにおける交流・にぎわいを創出

(効果)

令和6年8月の実証実験「平岸夏祭り」では、平時と比較して滞在時間が約23倍(2・3分→51.9分)に増加し、地域の交流促進効果が確認

都心

拠点

住宅

行政

企業

地域



(3) 札幌らしく、四季を通じて歩かざる

- 「四季を通じて快適に移動できる、地上・地下の重層的な歩行ネットワーク」

(概要)

地上・地下をつなぐ動線（エレベーターやエスカレーター）の確保に加え、建物間をつなぐ地下通路・空中歩廊・デッキ等を整備

(効果)

屋内・屋外、地上・地下の歩行者空間を整備することにより、季節・天候・時間に合わせて移動する空間を選ぶことができる

都心

拠点

住宅

行政

企業

地域



- 「河川空間を活用したにぎわい空間創出イベント」

(概要)

札幌の短い夏を自然と共に楽しみ、河川に安全に触れる機会を提供し、さらに飲食スペースや子どもの遊び場を設置することで、多世代が楽しめる場所を創出

(効果)

令和7年8月に豊平川河川敷で10日間にわたって開催された「川見」では、期間中に52,584人の来場があり、多くの人が自然に触れ、世代を超えた交流促進に貢献

都心

拠点

住宅

行政

企業

地域



- 「スノーキャンドルの設置など、冬季の景観向上に資する取組」

(概要)

地域住民自らの手によりスノーキャンドル等を制作し、いつもの空間（スペース）を歩いて楽しい居場所（プレイス）に変化させる取組

(効果)

令和7年2月に実施した「偕楽園 雪灯りと夜さんぽ」では、夜間かつ冬期間にも関わらず、3時間で200名以上の来場者を記録し、エリアの回遊性向上や外出促進に寄与

都心

拠点

住宅

行政

企業

地域



- 「自然×雪を味わう足湯施設の整備」

(概要)

温まりながら自然の雪景色を眺める「雪見」を楽しむことができ、さらには周辺の観光施設との連携により、周遊拠点としても機能する足湯施設を整備

(効果)

令和6年12月20日に定山溪地区に新たな足湯施設「二見の湯」が完成。周辺エリアを含めた回遊性の向上に寄与

都心

拠点

住宅

行政

企業

地域



第1章

策定の背景

第2章

目指すまちの姿

第3章

具体的な
取組・手法

第4章

推進体制
支援策の方向性

(4) 誰もが安心して、円滑に移動できる

- 「道路空間の再配分等による歩行者空間、自転車通行空間の確保」

(概要)

特に自転車通行空間が1.5m※²⁶よりも狭い路線において、車道の幅員構成の見直しや車線数の見直しによる道路空間の再配分により安全な自転車通行空間を確保

(効果)

自転車の歩道通行の抑制による歩行者対自転車の事故防止や、車道通行時の自動車等との接触事故を防止。また移動の脱炭素化によりゼロカーボンシティの実現にも寄与

都心

拠点

住宅

行政

企業

地域



- 「地下鉄駅バリアフリー経路の複数化（エレベーター新設）」

(概要)

地下鉄駅において移動等円滑化経路の充実を図るため、エレベーターを増設

(効果)

誰もがバリアを感じることなく安心して移動することができる環境整備に寄与

都心

拠点

住宅

行政

企業

地域



- 「車両速度抑制等、生活道路における人優先の交通安全対策」

(概要)

北海道開発局、北海道警察と協力し、区域（ゾーン）を定めて最高速度30km/hの速度規制とその他の安全対策を組み合わせ、速度抑制や抜け道としての通行を抑制

(効果)

令和6年度には東区において可搬式ハンプ（右写真）を試験設置し、走行速度30km/h以上の割合がハンプ前後区間で約2割低下、抜け道利用割合が約1割低下したことを確認

都心

拠点

住宅

行政

企業

地域



- 「バス待合環境の改善」

(概要)

利用状況等を踏まえたバス停の上屋の整備や、デジタルサイネージの設置等による待合環境を改善

(効果)

主に天候による影響を低減させるほか、ベンチ等の設置などにより待ち時間の環境が改善

都心

拠点

住宅

行政

企業

地域



※²⁶...出典：札幌市自転車通行空間整備 実施計画2025より

- 「児童の登下校環境を守るスクールガード」

(概要)

市内の小学校、幼稚園、特別支援学校を対象に、児童の登下校時などに見守り活動を行うボランティアとしてスクールガードを配置

(効果)

腕章などを着け、学校や通学路付近を巡回することにより、犯罪を抑制するとともに子ども達に安心感を与え、学校と地域の連携による安全・安心なまちづくりを推進

都心	拠点	住宅
行政	企業	地域



- 「バリアフリー経路情報を発信するUniversal MaaSユニバーサル地図／ナビ」

(概要)

街歩きイベントにおいて車いすユーザーの方などと収集したバリアフリー経路情報（ユーザー情報）のほか、主要な市有施設などのバリアフリー情報等（公式情報）を掲載

(効果)

経路検索による出発地から目的地までの最短ルートの表示が可能となっており、移動等に役立つ情報を誰もが簡単に調べることが可能に

都心	拠点	住宅
行政	企業	地域



- 「地元企業や地域住民による冬季の砂まき活動」

(概要)

地元企業や地域住民自らが各生活圏域において歩道等の砂まき活動を行うことで、時々刻々と変化する冬季の路面環境に対応し、転倒危険防止を図る

(効果)

(令和5年度に雪道で転倒して救急搬送された人数は、過去最多の1887人) 地域住民の協力も得ることで、冬季の安全な歩行環境に寄与

都心	拠点	住宅
行政	企業	地域



- 「公共的空間における観光案内機能の充実」

(概要)

AIチャットボットを活用した無人観光案内や、手荷物一時預かりサービスなど、時代に合わせた観光案内機能の充実を検討し、また、デジタル技術を活用した観光案内サイン充実や広告を活用した持続可能な観光案内サインを運用

(効果)

観光客への効果的な情報発信を図ることで、観光満足度の向上に寄与

都心	拠点	住宅
行政	企業	地域



第1章

策定の背景

第2章

目指すまちの姿

第3章

具体的な
取組・手法

第4章

推進体制
支援策の方向性

- 「新たな公共交通システムの導入検討」

(概要)

札幌駅周辺の再開発等に伴う新たな交通需要に対応し、移動の利便性・回遊性を高めるとともに、デザイン性の高い車両や街路空間により魅力的な景観を創出することで札幌市のブランド力向上を図るため、新たな公共交通システムを検討

(効果)

都心部の新たな魅力の創出だけでなく、水素車両を用いた運行（検討中）により、移動の脱炭素化にも貢献

都心	拠点	住宅
行政	企業	地域



- 「公共交通ネットワークの維持と利用促進」

(概要)

バス路線の維持に向けた取組・支援を進めるほか、利用促進・利便性向上に向けた取組として、現在実施しているノンステップバスなどのバリアフリー車両の導入支援を行うとともに、バス路線再編等の状況を踏まえ、バスとの乗継制度や新たな決済手段を検討

(効果)

札幌市総合交通計画において定める「公共交通を軸とした交通体系の実現」に寄与するとともに、自家用車利用と比較して一人当たりの移動の脱炭素化に貢献

都心	拠点	住宅
行政	企業	地域



第1章

策定の背景

第2章

目指すまちの姿

第3章

取組・手法
具体的な

第4章

推進体制
支援策の方向性

(5) 環境に優しく、みどりとともに暮らせる

● 「自転車活用の推進」

(概要)

前項にあげた自転車通行空間の整備に加えて、サイクリングロードなどの自転車ネットワークの機能強化や駐輪場の整備、シェアサイクルの利用促進等により、自転車の利用環境を充実

(効果)

自家用車から自転車移動へ転換することにより移動の脱炭素化に寄与。運動効果による健康寿命の延伸にも貢献

都心

拠点

住宅

行政

企業

地域



● 「民間開発等との連動による、屋内外の緑地空間創出」

(概要)

民間事業者により敷地内の緑化を行い、公共空間以外でも、みどり豊かな潤いのある良好な景観形成や環境面に優れた空間を形成

(効果)

令和6年10月に実施した緑化施設利用者へのアンケートでは、「緑化による企業のイメージアップ」は約67%、「緑化空間に再度来たい」は約77%の回答があり、価値向上に寄与

都心

拠点

住宅

行政

企業

地域



● 「地域コミュニティの核となる公園施設の整備や活用の推進」

(概要)

民間活力による公園の魅力向上を目的とした「公募設置管理制度（Park-PFI）」の導入

(効果)

札幌市初のPark-PFI導入公園となった「百合が原公園」では、「つながり」を誘発する新時代の公園づくりの新たなモデルとして、地域コミュニティの核となることが期待

都心

拠点

住宅

行政

企業

地域



● 「地域まちづくり団体や町内会などによる緑化・美化活動」

(概要)

公園や広場、街路空間などにおいて、町内会やボランティア団体などによる植栽管理を行うことにより、まちにみどりを創出

(効果)

令和4年11月に完成したポケットパーク「苗穂さんかく広場」では地域にゆかりのある亜麻やホップの管理を行い特色のある緑地空間を創出し、地域の交流促進にも貢献

都心

拠点

住宅

行政

企業

地域



第1章

策定の背景

第2章

目指すまちの姿

第3章

具体的な
取組・手法

第4章

推進体制
支援策の方向性

● 「下水熱を活用したロードヒーティング」

(概要)

再生可能エネルギーのひとつである「下水熱」を活用して歩道上の融雪を行う

(効果)

令和7年2月にリニューアルオープンした、中央区複合庁舎において採用することにより、冬期の安全で快適な歩行環境を実現。「ZEB Ready※²⁷」等の環境認証の取得にも貢献

都心

拠点

住宅

行政

企業

地域



● 「新たな公共交通システムの導入検討」※再掲

(概要)

札幌駅周辺の再開発等に伴う新たな交通需要に対応し、移動の利便性・回遊性を高めるとともに、デザイン性の高い車両や街路空間により魅力的な景観を創出することで札幌市のブランド力向上を図るため、新たな公共交通システムを検討

(効果)

都心部の新たな魅力の創出だけでなく、水素車両を用いた運行（検討中）により、移動の脱炭素化にも貢献

都心

拠点

住宅

行政

企業

地域



● 「公共交通ネットワークの維持と利用促進」※再掲

(概要)

バス路線の維持に向けた取組・支援を進めるほか、利用促進・利便性向上に向けた取組として、現在実施しているノンステップバスなどのバリアフリー車両の導入支援を行うとともに、バス路線再編等の状況を踏まえ、バスとの乗継制度や新たな決済手段を検討

(効果)

札幌市総合交通計画において定める「公共交通を軸とした交通体系の実現」に寄与するとともに、自家用車利用と比較して一人当たりの移動の脱炭素化に貢献

都心

拠点

住宅

行政

企業

地域



※²⁷...ZEB Ready：年間一次エネルギー消費量を基準から50%以上削減した建築物

2.リーディングプロジェクト

「Well-Moving City SAPPORO」の実現に向けて、「都心」「地域交流拠点」「住宅市街地」エリアからそれぞれ一つずつリーディングプロジェクトを位置づけ、先行的に取り組を進めます。

(1) 「大通公園周辺」－都心

札幌の都心を東西に貫く大通公園は、都市の象徴的存在として長年市民に親しまれてきました。昭和47年（1972年）の札幌オリンピック前後に建設された周辺施設は、今まさに更新の時期を迎えており、公園自体も、平成元年からの再整備から30年以上が経過し、施設の老朽化が進むとともに、イベント開催の多様化や市民のライフスタイルの変化により、公園の使われ方や求められる役割が大きく変化しています。こうした中で、大通公園が培ってきた歴史と価値を継承しつつ、次の時代にふさわしい新たな魅力と活力を創出するため、リニューアルの検討を進めています。



写真：大通公園の現在の様子

また、大通沿道の建物は更新時期が近付いているものが多く、今後、建替が進んでいくことが見込まれます。その際にはオープンスペースや道路空間の在り方なども考慮した、歩行者の為の空間づくりが必要になります。憩いやにぎわいの場としての道路空間の柔軟な利活用など、街区・道路・公園の一体感がある、居心地がよく「歩かざる」空間の形成に向けた検討を進めます。



図：「大通公園のあり方」
2025年（令和7年）3月 札幌市策定



図：「大通及びその周辺のまちづくり方針」
2023年（令和5年）10月 札幌市策定

第1章

策定の背景

第2章

目指すまちの姿

第3章

具体的
な
取組・手法

第4章

推進体制
支援策の方向性

(2) 「真駒内駅前地区」－地域交流拠点

真駒内地域は、みどり豊かな住宅地として整備され、昭和47年には札幌冬季オリンピックの主会場となり、施設整備が集中的に進められるなど発展してきましたが、近年は人口減少・少子高齢化が進んでいます。このような状況を踏まえ、「札幌市まちづくり戦略ビジョン」では交通結節点である真駒内駅周辺を地域交流拠点として位置付け、令和5年度には「真駒内駅前地区まちづくり計画」を策定し、真駒内地域はもとより南区全体の拠点として駅前地区の再生に向けた取組を進めています。

具体的には、「人・公共交通主体」のまちづくりを実現するため、平岸通を迂回化し、駅、交流・交通広場、民間施設（商業等）を地上レベルでつなぐことにより、切れ目のない人の動線を構築します。また、にぎわいの核となる商業機能の導入、人々の滞留・交流を促す広場の整備、地域イベントの実施や観光案内等の情報発信などに取り組んでいきます。



図：イメージパース（俯瞰）

また、真駒内地域に多く立地する公的団地についても、中長期的には老朽化への対応が必要となることが予想されるため、大規模な土地利用転換となる可能性も見据え、各関係機関と連携し、地域の特性を十分に考慮した真駒内地域の継続したまちの再生について検討していきます。

これらの真駒内駅前周辺地区のまちづくり及び各関係機関と連携した継続的なまちの再生を通じて、真駒内地域の住宅地の魅力を高めるとともに、歩行者の回遊性向上についても取り組んでいきます。



図：土地利用計画図



図：連鎖的な土地利用転換のイメージ

※図は全て「真駒内駅前地区まちづくり計画(札幌市策定)」より

(3) 「本郷商店街」－住宅市街地

白石区に位置する本郷商店街は、60年以上にわたって地域経済における重要な役割を果たしており、季節ごとに主催する「桜まつり」や「萬蔵祭（夏祭り）」などの特徴的な催事を通じた地域の歴史や文化の継承発展、世代や職業を越えた交流にも尽力するなど、商業団体としての枠にとどまらない地域コミュニティの中核としての役割も担っています。

また、本郷商店街は札幌市初のショッピングモール事業として整備された、一方通行の車道と広い歩道という特徴的な道路空間を有しています。

この道路空間は、人々のにぎわいや交流の場としての活用を目指して整備されましたが、商店街や地域からの要望がありながらも一般的な道路としての利用に留まり、その特徴を十分生かせずにいるのが現状です。



写真：本郷商店街の桜並木



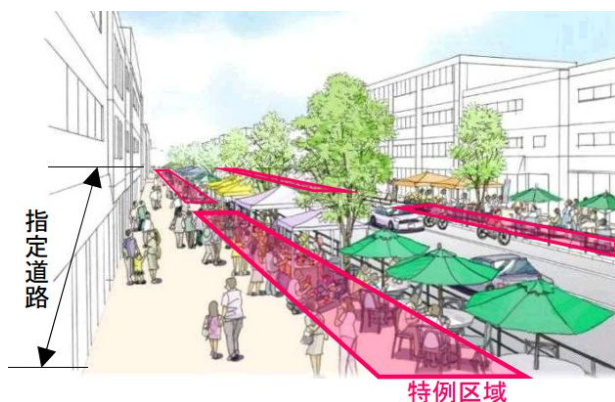
写真：ショッピングモール事業

そうしたなか、令和2年の道路法改正により「歩行者利便増進道路（通称：ほこみち）制度」が創設されました。これは、快適な生活環境の確保と地域活性化に資する場合には道路占用許可の基準が緩和され、歩道上にベンチやテーブル等が設置しやすくなる制度で、道路を移動空間としてだけでなく、そこに滞在し、楽しみ、交流するための空間として構築することができます。

本市では、本郷商店街が所在する市道本郷中央線において、市内第一号となる「ほこみち」の指定を目指し、商店街を中心とした地域コミュニティの自主性を尊重した道路空間の利活用を支援します。これにより、既存の商店街の概念に留まらないエリア全体の魅力向上を図り、地域内外から人々が自然と集まり、立ち寄り、憩える。歩かざるまちづくりを推進します。



写真：萬蔵祭における道路空間活用



図：歩行者利便増進道路イメージ図
(出典：国土交通省)

3.モデルケースの紹介

第3章の最後では、これまでに札幌で実施されてきた多様な取組の中から、特にモデルとなる事例を取り上げます。「Well-Moving City SAPPORO」推進の視点から、特に重要なポイントを示すことで、今後の他地域におけるまちづくりへの展開を促します。

(1) 北3条広場の官民連携による魅力的なパブリックスペース創出

旧北海道庁赤れんが庁舎前に広がる「北3条広場（愛称：アカプラ）」は、2014年（平成26年）に供用を開始した、官民連携による都市再生の象徴的事例です。元は車道として使用されていたこの空間は、隣接地の再開発における公共貢献により、延長約100m、面積約2,800㎡のパブリックスペースとして整備されました。周辺には、多くのオフィスが立地し、平日はオフィスワーカーの憩いの場、休日にはイベントが開催されるにぎわいの拠点として定着しています。音楽ライブや季節ごとの催事、冬季のスケートリンクなど、年間を通して多彩な使い方がされており、近年では3×3バスケットボールコートイベント設置など、活用の用途が進化し続けています。都市の中心部における人中心の空間づくりとして、市民と来訪者の双方から高い支持を得ている好事例です。



写真：整備前の車道空間



写真：整備後の広場空間

北3条広場の魅力的なパブリックスペース活用において、指定管理者である「札幌駅前通まちづくり株式会社」が重要な役割を担っています。同社は、札幌駅前通地下歩行空間（広場）の管理も手掛ける全国的にも著名なエリアマネジメント団体です。単なる施設の管理に留まらず、「いかに地域の価値を向上させるか」という視点に基づいた企画・運営を行っています。

このように、質の高い空間整備と一体となって、エリアの価値向上を持続的に実現するマネジメントの重要性は、魅力的なパブリックスペースを創出するためのモデルケースとして注目されています。



写真：近年の多彩な空間活用事例

(3) 平岸地区における住宅街活性化の取組

札幌市豊平区の平岸地区では、地域に根差したマルシェイベント「平岸マルシェ」が定期的で開催され、住宅街のにぎわいづくりの先進事例として注目されています。

特に令和6年夏には、地下鉄平岸駅から約400mの生活道路および「風の子公園」を活用した「ナイトマルシェ」の実証実験が実施されました。キッチンカーや休憩スペースの設置、盆踊りなどのイベントを通じて、歩行者数は平時と比較して約6倍、滞在時間は約23倍に増加。従来の“通過する空間”が“滞留・交流する空間”へと大きく変容しました。地域の企業、大学、商店街、行政が連携し、月2回開催を数年継続する中で、文化として定着しつつあります。



写真：平時の道路空間



写真：実証実験時（キッチンカー等）



写真：平時の公園



写真：実証実験時（子ども向け企画）

平岸マルシェは、住宅街において「歩かざる空間」を創出した好事例であり、「Well-Moving City SAPPORO」の理念を体現しています。特に生活道路と街区公園を一体的に活用することで、歩行者数や会話・飲食などのアクティビティが顕著に増加し「歩くことの価値」を市民自身が実感できる場となりました。加えて、学生主体のワークショップや運営により、地域の若手人材の育成と地域参加の新しい形も提示しています。他地域への展開には、すでに存在する空間の再評価、地域住民との信頼構築、行政の柔軟な制度運用が鍵となります。平岸での成果は住宅市街地におけるパブリックスペース活用の実証的なモデルケースであり他地域への波及が期待されます。



写真：学生主体のマルシェ運営



写真：ナイトマルシェと連動したイベント

04

推進体制、 支援策の方向性

1. 推進体制
2. 支援策の方向性
3. 今後のロードマップ

第4章 推進体制、支援策の方向性

1. 推進体制

「Well-Moving City SAPPORO」の実現には、行政だけでなく、産学官民それぞれの強みを活かした「共創（Co-Creation）」が不可欠です。札幌市では、この官民共創による官民連携を全庁的に推進しており、2024年（令和6年）5月に「札幌市官民連携指針」を策定し、同年7月には「札幌市官民連携窓口（SAPPORO CO-CREATION GATE）」を開設しました。

本ビジョンで対象とするパブリックスペースは、道路、公園、広場、民間施設の公開空地など、その特性や規模（S・M・L・XL※²⁸）が多岐にわたるため、多様な主体が関与します。この多様性を踏まえ、画一的な役割分担を定めるのではなく、産学官民それぞれの基本的な役割を明確化した上で、対話と実践を通じて共創関係を築くための「（仮称）Well-Moving Network」の設置を検討します。

このネットワークは、主な構成員を市内各地のエリアマネジメント団体、学識経験者、行政等とし、それぞれの課題や強みを持ち寄りながら、対話と実践を繰り返す共創型の運営を目指します。短期的には、「Well-Moving推進プログラム」の策定に向けた協働や、実証実験などの共同実施を検討します。また、長期的には、パブリックスペース活用に関するノウハウ共有をはじめとする「まちづくり人材」の育成にも連携して取り組むことを想定しています。

2025年（令和7年）7月に開催された「サッポロウォークブルシンポジウム2025」は、市内各地のまちづくり団体が一堂に会する貴重な機会となりました。このシンポジウムでは、各団体の活動内容の共有や、課題解決に向けた討議が効果的であったとの評価が多く寄せられています。今後も、一般市民を含め、広く札幌市のまちづくりを共有する機会を設けることを検討していきます。



写真：サッポロウォークブルシンポジウム2025

※²⁸...S：軒先スケール、M：建築スケール、L：インフラ（広場等）スケール、XL：都市スケール
（「パークナイズ 公園化する都市（学芸出版社）」より引用）

前述の「（仮称）Well-Moving Network」の活動内容とは別に、本ビジョンにおける産学官民の一般的な役割分担を以下に明記します。この多様な主体による幅広い活動と、「（仮称）Well-Moving Network」との連携により、まちづくりにおいて、活動の裾野の広さと、取り組みの深さの両立を目指します。



写真：産官学民が一体となって取り組んだ
「新さっぽろワクワク冬の実験フェスタ」の朝礼風景



(1) 地域住民等

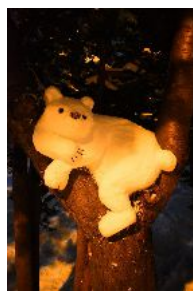
「Well-Moving City SAPPORO」の実現には、地域住民が最も身近な担い手であり、生活者の視点によるまちづくりの原動力となります。特に、地域まちづくりの主体（プレイヤー）として、パブリックスペースを積極的に利活用していくことが重要です。

2025年（令和7年）2月には、普段は活用されていない冬の「偕楽園緑地」において、町内会が主体となり、散策路の除雪やスノーキャンドルの設置、スノーアーティストとの連携により魅力的な歩行・滞在空間を創出しました。夕方の3時間で約200名の来場者が訪れ、冬期に希薄になりがちな地域住民同士の久々の交流の場にもなりました。

また、ミニ大通（北4条通歩行者専用道）では、竣工から50年が経過したミニ大通の魅力を継承すべく、地域住民や企業が「ミニ大通を未来へつなぐ協議会」を設立しました。2024年（令和6年）からは、魅力的な空間を活用した「ミニ大通誕生祭」を開催する等、地域主体のまちづくりが進められています。



写真：偕楽園緑地「雪灯りと夜さんぽ」



写真：ミニ大通誕生祭

さらに、地域住民が主体的に活動する以外にも「Well-Moving City SAPPORO」の推進においては、一参加者として地域イベントや町内会活動に参加すること、あるいは移動手段として自家用車ではなく公共交通機関を選択することも、重要な役割を果たすことになります。

(2) 大学・高校等

大学や高校等の教育機関は、「Well-Moving City SAPPORO」の実現において、知的・人的資源の担い手として、非常に重要な役割を果たします。大学は都市課題の研究・分析を通じた政策提言の提供者であり、地域実践の場ではゼミ単位でのまちづくり参画が期待されます。実際に、札幌学院大学においては、「札幌市各拠点における持続可能なエリアマネジメントに係る研究」を行政と協働で実施しました。

また平岸マルシェ（北海学園大学）や八百カフェ（札幌市立大学）などでは、学生が主体となって地域と協働しており、都市に根ざした学びと貢献が展開されています。高校生においても、札幌市教育委員会が実施する「まなびまくり社」のような探究学習が進められ、若年層が地域に関心を持ち、まちづくりの一翼を担う動きが芽生えています。



写真：実証実験成果報告会



写真：平岸マルシェ

(3) 民間企業等

民間企業等は「Well-Moving City SAPPORO」の実現において、創造性と実行力を発揮する重要なパートナーです。民間施設等のハード整備においては、低層部におけるにぎわい用途の導入や、良質なオープンスペース整備などを推進します。また、パブリックスペースにおいて民間活力の導入により、にぎわい創出を図ることや、エリアマネジメント団体等への参画により、地域と連携した「場のマネジメント」を担うことにも期待が高まっています。

豊平川の河川敷を活用して毎年8月に2週間程度実施される「川見」イベントでは、札幌の短い夏を自然とともに楽しみ、河川に安全に触れる機会を提供することで、2025年（令和7年）実績では約5万人以上の来場があり、札幌の夏の文化として定着し始めています。



写真：「川見」を楽しむ人々



写真：北3条広場（アカプラ）の民間活用

(4) 行政

行政は「Well-Moving City SAPPORO」の実現に向け、本ビジョンを出発点に、具体的な推進計画である「Well-Moving推進プログラム」を今後策定し、計画的なハード整備やリーディングプロジェクトの推進などを着実に進めます。

札幌市役所内においては、パブリックスペースの円滑な活用をはじめとする諸課題に対し、本ビジョン策定のために立ち上げた「札幌市ウォークブル推進本部会議」を継続・発展させます。これにより、規制部門を含む庁内横断的な推進体制を整備し、全庁的な推進フローを明確化することで、一貫した実行力と柔軟な対応力を確保します。さらに、空間活用と官民共創のノウハウを持つ人材の育成を積極的に進めます。

また、前述した「（仮称）Well-Moving Network」を支援し、市民や企業の創意工夫を引き出すため、積極的にデータセットを提供し、オープンデータの利活用を促進します。さらに、これまで都心部が中心であったパブリックスペース活用施策を、地域交流拠点にも戦略的に展開し、地域特性に応じた取り組みを推進します。

これに加え、次項で示す「支援制度の構築・運用」を着実に進めることで、民間主体の活動を後押しする役割を果たします。



写真：札幌市ウォークブル推進本部会議



写真：地下歩行空間のハード整備

2.支援策の方向性

前項で示した推進体制の効果を最大限に高めるため、行政が実施することで特に効果が見込まれる支援策の方向性を整理します。これらの支援策については、2024年度（令和6年度）に実施した市民公募型実証実験の終了後、参加団体とのワークショップ等で得られた意見に基づき、以下の3つの柱を中心に検討を進めていきます。

(1) 整備／活用

「Well-Moving City SAPPORO」の実現には、パブリックスペースの整備と活用を一体的に促進する仕組みが不可欠です。これまでは道路や広場、公開空地等の整備と活用が切り分けて考えられてしまうケースや、柔軟な活用をしようとしても制度上の制約等が障壁となることも多くありました。

今後は、新たに「歩行者利便増進道路（通称：ほこみち）」制度などを活用し、地域の創意工夫を反映した空間整備・活用を推進します。さらに、冬季のスノーキャンドル設置などの季節イベントへの支援、再開発時の公共貢献に対する多様なインセンティブの付与、緩和型の土地利用計画制度の運用による良好な民間都市開発の誘導など、多角的な支援環境を構築していきます。



写真：福山本通商店街（広島県福山市）
※令和3年9月ほこみち指定



写真：公開空地（モエクサッポロ）

【既存制度（抜粋）】

- 「札幌市景観まちづくり助成金制度」
地域住民や団体が行う良好な景観の形成に関する活動（花壇整備など、空間づくりに関する活動を含む。）に対して助成（上限30万円）し、活動を後押しする仕組み
- 「緩和型土地利用計画制度」
快適な歩行者空間の創出や、にぎわいを生む施設の設置、環境性能の高い建築など、まちづくりに貢献する開発計画に対して、地区計画などを用いて容積率の制限を緩和する制度

(2) 手続き／許認可

パブリックスペースについて、市民公募型実証実験への参加者を対象としたワークショップでは、「活用したくても手続きのやり方がわからない。」「そもそも活用できることを知らなかった。」という声が多く聞かれました。

そこで札幌市では新たに「（仮称）パブリックスペース活用ガイドライン」を策定します。道路や公園、広場や公開空地等において、必要な手続きや申請フローを整理し、さらに簡素化できるものは手続きそのものを減らしていくことや、活用要件の緩和などを検討し、活用者目線に立った取組を推進していきます。



写真：公園を活用した子ども向けイベント



図：千代田区ガイドライン事例

【既存制度（抜粋）】

- 「駅周辺活用スペースにおけるワンストップ相談窓口（手稲駅・苗穂駅等）」
公共的空間（駅自由通路など）を活用したイベントや活動について、所管部局を横断した「一括相談・調整」が可能な仕組み。申請者の調整負担が軽減され、地域活動やにぎわい創出の起点となっている

(3) 担い手確保／育成

町内会加入率の低下や高齢化など、地域の担い手が減少傾向にある中、各地域のパブリックスペースを自ら活用・運営する「担い手」の確保や育成が重要です。そこで札幌市が参画する「札幌駅前地区まちづくりプラットフォーム検討会議」では新たに「公共的空間活用人材の育成」に資する取組である「ストリートデザインスクール」を2024年（令和6年）より開講しました。

このほか札幌市教育委員会にて実施している探求学習事業では、「都市×教育」の観点を取り入れ、高校生の探求活動のフィールドとして大通公園を活用するなど、人材育成の場としてのパブリックスペース活用にもより力を入れていきます。

さらに1人ひとりの人材育成だけでなく、札幌市内各地で活動が活発化し始めているエリアマネジメント団体について、その重要性を十分に認識した上で、持続可能な支援の在り方を検討していきます。



写真：公共的空間活用実証実験
※札幌市立高校 探求学習協力事業



写真：新さっぽろワクワク冬の実験フェスタ



写真：時計台前仲通り実証実験
※ストリートデザインスクール2024

【既存制度（抜粋）】

●「官民連携まちなか再生推進事業」

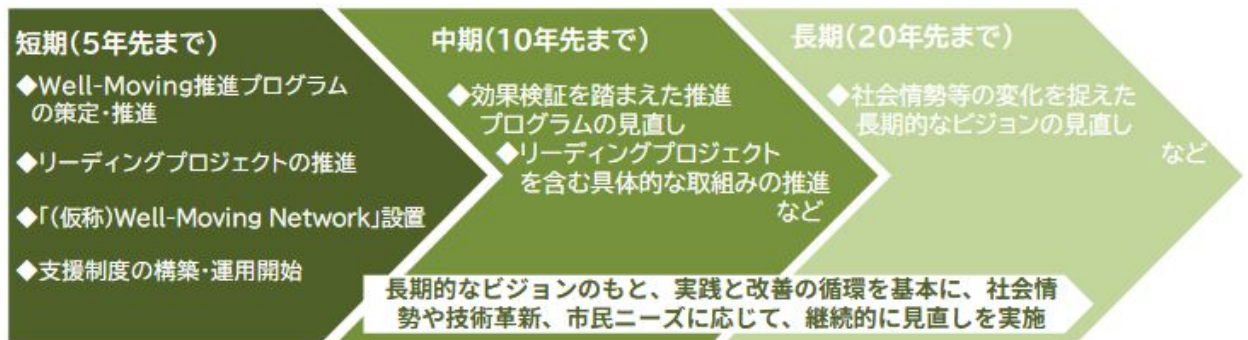
官民の様々な人材が集積するエリアプラットフォーム構築やエリアの将来像を明確にした未来ビジョンの策定、ビジョンを実現するための自立・自走型システム構築に向けた取組を総合的に支援する制度（所管：国土交通省都市局）

●「まちづくりアドバイザーの派遣」

大学生等によるまちづくり実行委員会の組織化を支援し、まちづくり活動の成果発表の場「まちフェス」等の企画・実施を支援する取組

3. 今後のロードマップ

本ビジョンは、令和8年（2026年）から令和27年（2045年）までの20年間を見据えた長期的な計画であり、その実現に向けては、社会情勢や技術革新の変化に柔軟に対応しながら、段階的・戦略的に推進していく必要があります。したがって、計画の期間を①短期（5年先まで）、②中期（10年先まで）、③長期（20年先まで）に区分し、それぞれのフェーズに応じた取組を明確化します。



図：今後のロードマップ

まず、①短期（5年先まで）は、本ビジョンの理念を具体的な事業として着実に実行する期間と位置づけ、「Well-Moving推進プログラム」や「リーディングプロジェクトの推進」に加え、「（仮称）Well-Moving Network」の設置、支援制度の構築・運用開始を目指します。

次に、②中期（10年先まで）では、短期で得られた成果や市民ニーズ、社会情勢の変化に基づき施策を見直します。特に、各地区での個別の取り組みに加え、地区間の連携を強化し、効果を面的に拡大するための推進戦略の見直しを行います。

最後に、③長期（20年先まで）では、社会情勢の変化を見据えた長期的なビジョンの見直しを実施します。本ビジョンの長期的な方向性は維持しつつも、AI技術の進展など変化の激しい現代に対応するため、実践と改善の循環を基本とします。毎年のPDCAサイクルを通じ、技術革新や市民ニーズを柔軟に反映させながら進めていきます。